

Close-up Interview (2月号 表紙の顔)

小林 よしみ

YOSHIMI KOBAYASHI

悲願の初タイトル獲得で 人生設計も大きく方向転換

コロナ禍に揺れた2020年のプロトーナメント最終戦となった全日本女子プロ選手権で、悲願の初タイトルを獲得した小林よしみプロ。それはデビューから11年間の、知られざるさまざまな葛藤を乗り越えてたどり着いた頂だった。

デビューから11年目 ある思いを秘めて…

「プロで丸10年やってきて、自分の感覚ではいいところまではいけても、優勝は難しいのかなという気持ちがありました。去年の11月に『子供も欲しいし、12月の全日本選手権でひと区切りをつけようかと思う』という話を(夫の)哲也プロにして、彼も『自分でそう思うならいいんじゃないか』と言ってきていました」

驚きの告白だったが、そう思ったことで余計な肩の力が抜けたのか、その全日本選手権で4年ぶりの決勝進出を果たす。

「準決勝の最終ゲームを前に、決勝進出ラインの4位の大嶋有香ちゃんからは66ピン差の8位。だからテレビに残れるとはまったく思っていないで、それよりも順位を一つでも上げようという気持ちでした」

267を打ってTV決勝4番目の座に滑り込んだよしみの、4位決定戦の相手は、新設トーナメントのAPAプレゼンツから3連勝中、そして前年に続く連覇のかかる姫路麗。

「当たって砕けるではないけど、1ゲーム勝負なのでやるしかないという気持ちでした。練習ボールではラインは見えていたし、このボールがダメになったらこっちに替えて

というプランもできていたんですけど、いざ始まると、これまで経験したことがない緊張で、足が前に進まない。だからポケットにいかないのはラインが変化しているのか、自分の投げ方のせいなのか、判断がつきませんでした」

その4位決定戦を1ピン差で勝ち上がると、さらに小久保実希との3位決定戦を制して、トップシードの松永裕美への挑戦権を手にした。

「やっとここまでできたけど、優勝には裕美プロにあと2ゲーム連勝しないといけないと思うと、気が遠くなりました(笑)。でも4位決定戦の9フレ、10フレ1投目にダボって以降は、落ち着いて、集中して投げられました」

いちばん欲しかった全日本、しかも近年の女子プロ界を牽引してきた姫路、松永を倒しての、初タイトル獲得だった。

「あれから1カ月以上経つけど、いまだに不思議な感覚です。とくに麗プロと裕美プロを決勝で下しての優勝を、周りの方にもすごく言われます。何しろ全日本の過去10年の記録をさかのぼって見ても、優勝はほぼ二人で占めているんですから」



▶ 昨年の緊急事態宣言時には、アスリートフードマイスターの資格を取得した

姉・あゆみと比較され 苦しんだ時期も…

ご存知のとおり、姉・あゆみ(44期)、弟・龍一(53期)もプロボウラーの、ボウリング一家に育った。

「家族で遊びに行くようになって子供たちがあまり、両親はそのうち送り迎えなどの世話係で、投げる方からは遠ざかっていきました。1歳上の姉は、

▶ 決勝前の休憩時間に母に電話をしつらうすでに泣いていましたと、会場に来られなかった両親の無言の声援も力に、全日本を制覇



サウスポーで投げ方もきれいでした。それに比べて特徴がなく、大会の成績もパツと面白くなくて、中学時代にはいんどボウリングを辞めた時期がありました」

しかし高校では、あゆみと組んで国体の少年女子団体戦で2年連続準優勝を飾った。

「国体は(渡辺)けやきプロと組んだ3年時も準優勝。その年は個人でも準優勝で、いいんだか悪いんだか…(苦笑)、結局優勝はできませんでした。姉は小さいころからプロになりたいと言っていたけど、私はそのつもりはなくて、高校生のころはナショナルチームを目指していました。ただ姉から『姉妹で受けた方が話題性もあるし、一緒に受けよう』と誘われて、卒業した翌年に、落ちて1回きりのつもりで受けました」

2010年のプロテストに、よしみは一発合格するが、誘ったあゆみの方が、まさかの不合格。

「ええ～っ(笑)と思いつつ、翌年もう1回受けるという姉を、先にプロ入りをして待つ

ことにしました」

ところが翌年合格したあゆみは、全日本女子プロ選手権で準優勝、第1シード入りなど、1年目から脚光を浴びる。

「悔しくて、すごく練習をしました。それが3年目の第2シード入りにつながったと思うけど、私がちょっと上にも、さらに上に姉がいた。気にしてないつもりでも“お姉ちゃん頑張ってるね”とか“お姉ちゃんに負けないようにね”と周りから言われると、余計意識させられました」

トーナメント中に発表される中間成績も、同期などよりは姉の成績を気にしていた。

「正直、姉の存在を煙たく思っていた時期がありました。でも今は、一緒に練習しようと思ったり、コロナ前は一緒にご飯に行ったり、お互いに理解し合えるいい関係になったと思います。プロテストを受けるときに誘ってもらって、結果的には感謝しています」

米遠征で思い知った 取り組みの甘さ

3年目で第2シード入りしたあと、シードは守っていたものの、成績は頭打ちになっていた。

「第2シードが3年ぐらい続いたときに、少しマイナーチェンジをしたぐらいでは、これ以上上にはいけないというのをすごく感じていました。それで2015年にケゲルのトレーニングセンターに行ったんです。実は『アメリカのトレセンに行ってみたら』ときっかけを作ってくれたのが、まだお付き合いもする前の哲也プロで

した」

斜行していたアプローチの歩き方など、基礎から手直しされたそうだが、それ以上にそこで練習をしていた現地の大学生から大きな刺激を受けた。

「ボールの威力もそうですが、何より投げていてブレがまったくない。大学生でもこんなにすごいのかと、衝撃を受けました。日本ではろくに準備運動もしないで投げ始めていたけど、投げる前に1時間ぐらいいっかり基礎トレーニングをやっていた。最初の1日で、これはいろいろ改めないといけないなと、気づかされました」

昨年の全日本で一区切りをといたプランは、優勝で大きく軌道修正を強いられることになった。

「でもうれしい誤算です。人生のピークかな(笑)と思うほど、皆さんからおめでとうと言ってもらいました。またあの感覚を味わうためにも、2勝目をしたいですね。そして1勝もできないんじゃないかと思っていた自分が言うのもなんですが、ランキング1位も目指したいなと思います。そのためには、今の自分のままでは無理だと思うので、そこに向けて次のステップに踏み出さないといけないと思います」



こばやしよしみ/1991年1月7日生まれ、栃木県出身。右投げ。2010年プロ入り(43期/ライセンスNo.470)。優勝1回。2020年終了時点のポイントランキング8位。所属:ラウンドワン/STEEL SPORTS。